

目的：社会規範の緩みがさまざまな場面において指摘されるなかで、若者たちは誰からも抑圧されることなく、自由に浮遊している。これが現代若者の生態の特徴であろう。しかし、このような状態が彼らを幸福にしているとは言いがたい。むしろ、欲求は上昇し続け、何を求めてよいかわからない焦燥感に煽られ、あふれる情報のなかで生きる目標を見出せないまま漂流している彼らは、アノミー状態のなかで苦しむ姿にもみえる。本研究ではこのような現代若者の「生きる」ことに対する意識を分析することに狙いを定めている。とくに「友達」化しているといわれる「家族」とのかかわり方に着目し、若者の「生きる」観に家族がどのような影響を及ぼしているのかを検証してみることにした。

方法：岡山市内の大学に通学する大学生を対象に質問紙による自記式集合調査法による調査を行った。配布数 250 票、有効回収数は 248 票 (99.2%) である。調査票の具体的内容は、理想の人・指針となる人の存在の有無、夢・希望のライフコースの有無、生き方・生活における充実度、家族への準拠程度・居場所の有無、死への関心程度などである。

結果：調査結果から、現代の若者は自分の生き方に対して無関心ではないことがわかった。現時点においては「オートマチズム」的な生き方をしているが、決して生きる意欲や将来への希望を失っているのではなく、むしろ将来に向かって「積極的」に生きることを強く希望している姿が見出せた。さらに若者にとって家族は非常に重要な存在であり、若者の生き方志向に家族が強い影響を与えていることも実証できた。